

カリキュラムの評価と改善

岐阜女子大学学長
高 口 努

1. 教育評価全体から見た カリキュラム評価の位置づけ

（1）教育評価の意義

教育活動と直接的あるいは間接的に関連した各種の実態把握と価値判断のすべて

梶田叡一著：教育評価（第2版）

(2) 教育評価の対象となるもの

- ①学習者個々人
 - ②教育活動
 - ③教育内容（カリキュラム）、教師
 - ④学習者個々人の成長・発達を潜在的に規定している
ものとしての学校の社会文化的風土
 - ⑤学校の物理的・社会的な環境条件
- カリキュラムは重要な教育評価の対象

（3）カリキュラム評価の主体

- ①教師
- ②学習者本人
- ③校長（施設長）を代表者とする学校（教育機関）の教職員の全体
- ④教育行政当局

梶田叡一著：教育評価（第2版）

（4）カリキュラム評価の対象

年間指導計画、時間割、教材の内容と構成、教材・教具の利用の仕方 など

→これらの評価を通して、学校・学級の整備充実がなされ、カリキュラムの開発と改善とがなされる

梶田叡一著：教育評価（第2版）

（5）学校教育における目的・目標 の視点からのカリキュラム評価

学習指導要領等で求められる教育活動
(カリキュラム) は、全ての子供にその確
実な学習の到達を目指し、「到達目標」と
特徴づけられるものであり、アセスメント
(評価) が厳格に求められる

梶田叡一著：教育評価（第2版）

2. 教育行政によるカリキュラム 評価・改善

（1）学習指導要領実施状況調査
(教育課程実施状況調査) による
学習指導要領の評価・改善

①学習指導要領実施状況調査 (教育課程実施状況調査)の概要

- ・学習指導要領に基づく教育課程の実現状況について、各教科における児童生徒の学習達成状況の把握や各種調査資料の検討等を通して総合的に調査研究し、学習指導要領に基づく教育内容が実際上どの程度児童生徒に理解されているか、学習上の問題点は何かなどを明らかにして、将来の教育課程や学習指導の方法の改善に資する

②学習指導要領実施状況調査 (教育課程実施状況調査)の実施状況

- ・1981(昭和56)年度～1983(昭和58)年度
- ・1993(平成5)年度～1995(平成7)年度
- ・2001(平成13)年度 (小・中学校) 2002・2003(平成14・15)年度 (高等学校)
- ・2003(平成15)年度 (小・中学校) 2005(平成17)年度 (高等学校)
- ・2012(平成24)年度・2013(平成25)年度 (小学校) 2013(平成25)年度 (中学校) 2015(平成27)年度 (高等学校)

②学習指導要領実施状況調査 (教育課程実施状況調査)の実施状況

- ・この他、「学習指導要領実施状況調査」の枠組みでは把握が難しい内容について、児童生徒を対象としたペーパーテスト又は実技調査、質問紙調査による、「特定の課題に関する調査」を実施

③学習指導要領実施状況調査（教育課程実施状況調査）による評価・改善の実際

○平成20・21年告示学習指導要領改訂

【教育課程部会 理科専門部会（第8回）配付資料】

資料4-1 理科の現状と課題、改善の方向性（検討のたたき台）

（課題）

✓ 教育課程実施状況調査において、過去同一問題の比較から全体としては上昇傾向がみられたものの、てこのつり合いや衝突、人体の構造や働き、物質の状態変化や化学変化における質量の保存、植物の生活と種類などの内容の基礎的な知識・理解が十分ではない状況がある。

③学習指導要領実施状況調査（教育課程実施状況調査）による評価・改善の実際

✓ 教育課程実施状況調査において、地層のでき方を推論する問題、意味付けや関係付けを伴う説明活動に関する問題、グラフを読み取り考察する問題、実験の途中経過を考察する問題などにおいて、科学的な思考力・表現力が十分ではない状況がある。

（改善の方向性）

✓ 理科の内容を系統的に指導し、科学的な概念の理解など、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る観点から、「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」などの科学の基本的な見方や概念を柱として、小中高等学校を通じた理科の内容の構造化を図る方向で改善してはどうか。

✓ 科学的な思考力・表現力の育成を図る観点から、学年や発達の段階、指導内容に応じて、例えば、1. 観察、実験の結果を考察する学習活動、2. 科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動、3. 探究的な学習活動を充実する方向で見直してはどうか。

（2）全国学力・学習状況調査による 学習指導要領の評価・改善

①全国学力・学習状況調査の概要

目的

- ◆ 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る
- ◆ 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◆ そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

対象

国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年 原則として全児童生徒

内容

- ◆ 教科に関する調査（国語、算数・数学は毎年実施、理科及び英語は概ね3年に1度実施）
- ◆ 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

実施年度

- ◆ 平成19年度～

②全国学力・学習状況調査による評価・改善の実際

○平成29・30・31年告示学習指導要領改訂
【算数・数学ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）】

（現行学習指導要領の成果と課題）

✓全国学力・学習状況調査等の結果からは、小学校では、「基準量、比較量、割合の関係を正しく捉えること」や「事柄が成り立つことと図形の性質に関連付けること」、中学校では、「数学的な表現を用いた理由の説明」に課題が見られた。

②全国学力・学習状況調査による評価・改善の実際

(資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実)

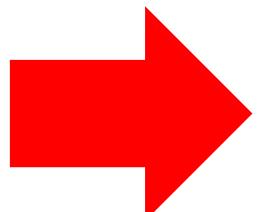
✓ 数量や図形に関する知識・技能は、生活や学習の基盤となるものであり、数学は自然科学を含む科学全般において言葉としての機能も果たしている。したがって、数学的な表現を理解したり、数学的に表現し思考したりする力などはこれからの中を生き抜く児童生徒にとって欠かせない能力である。児童生徒がこうした算数・数学のよさを認識するとともに、算数・数学を学ぶ楽しさや意義等を実感できるよう各学校段階を通じて数学的活動を一層充実させていくことが必要である。

戦後の国による主な学力調査の歴史

- 全国学力調査（1956(昭和31)年度～1966(昭和41)年度）
- しばらくの間、国レベルの学力調査は休止
- 教育課程実施状況調査の実施（1981(昭和56)年度から概ね10年ごとに4回実施）
- 学習指導要領実施状況調査の実施（2012(平成24)年度～）
- 全国学力・学習状況調査の実施（2007(平成19)年度～）

全国学力・学習状況調査がそれまでの学力調査と何が大きく違っていたのか

- A問題（知識）とB問題（活用）とに分けて出題。
- 100字程度で書かせる記述式問題を出題。
- 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する児童生徒質問紙調査および、学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する学校質問紙調査を実施。



これから求められる思考力・判断力・表現力をテスト問題により具現化し、カリキュラムや指導方法の評価・改善につながる調査内容とした

全国学力・学習状況調査の目的

- ◆義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、**教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る**
- ◆学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる
- ◆そのような取組を通じて、教育に関する継続的な**検証改善サイクルを確立する**

3. 各学校におけるカリキュラム評価・改善

（1）学校評価を通じた評価・改善

学校評価に関する法令の規定

○学校教育法

第42条 小学校は、文部科学大臣の定めるところにより当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図るため必要な措置を講ずることにより、その教育水準の向上に努めなければならない。

※幼稚園、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校等にもそれぞれ準用

学校評価に関する法令の規定

○学校教育法施行規則

第66条 小学校は、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について、自ら評価を行い、その結果を公表するものとする。

2 前項の評価を行うに当たつては、小学校は、その実情に応じ、適切な項目を設定して行うものとする。

学校評価ガイドライン（平成28年改訂）

目標設定

【学校全体としての目標の共有と体制の整備】

- 各学校の学校経営方針・計画、**教育課程**、指導計画、学校保健計画、学校安全計画、研修計画、施設設備の整備や予算に関する計画等の各種具体的な計画や、校務分掌、校内組織は、上記の目標等の達成を目指す上で適した内容となるよう、**隨時見直し**を行う。

（後略）

学校評価ガイドライン（平成28年改訂）

【評価項目・指標等を検討する際の視点となる例】

○教育課程等の状況

- ・学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況
- ・児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえた取組の状況
- ・児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況
- ・学校図書館の計画的利用や、読書活動の推進の取組状況
- ・体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況
- ・部活動など教育課程外の活動の管理・実施体制の状況
- ・必要な教科等の指導体制の整備、授業時数の配当の状況

学校評価ガイドライン（平成28年改訂）

- ・学習指導要領や各教育委員会が定める基準にのっとり、児童生徒の発達段階に即した指導の状況
- ・教育課程の編成・実施の管理の状況（例：各教科等ごと等の年間の指導計画や週案などが適切に作成されているかどうか）
- ・児童生徒の実態を踏まえた、個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の計画状況
- ・幼小連携、小中連携、中高連携、高大連携など学校間の円滑な接続に関する工夫の状況
- ・(データ等)学力調査等の結果、運動・体力調査の結果、児童生徒の学習についての観点別学習状況の評価・評定の結果

学校評価ガイドライン（平成28年改訂）

【第三者評価の項目・観点の例】

○教育課程等の状況

- ・学校の教育目標を踏まえて教育課程が編成・実施され、その考え方について教職員間で共有されているか
- ・児童生徒の学力・体力の状況を把握し、それを踏まえて教育課程が編成され、P D C Aサイクルに基づいて適切に改善されているか
- ・各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動の年間指導計画や週案などが適切に作成されているか、また指導体制が整備され、授業時数の配当が適切に行われているか

etc.

学校評価ガイドライン（平成28年改訂）

【継続的な情報・資料の収集・整理】

- 目標等の達成状況を把握し、また、学校の状況を客観的に示す上で、学校運営に関する様々な情報・資料を継続的に収集し整理することが重要である。各学校においては、これらの情報・資料を日常的・組織的に収集・整理し、教職員間で共有するとともに、自己評価の実施や保護者等に対する情報提供等に適切に活用する。

【自己評価の実施に当たっての留意点】

- 客観的に状況を把握する上で数値的にとらえて評価を行うことは有効と考えられるが、同時に、数値によって定量的に示すことのできないものにも焦点をあてる。

（2）カリキュラム・マネジメントを
通じた評価・改善

現行学習指導要領の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の
新設など

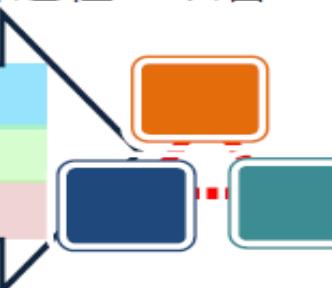
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的
的に示す

どのように学ぶか

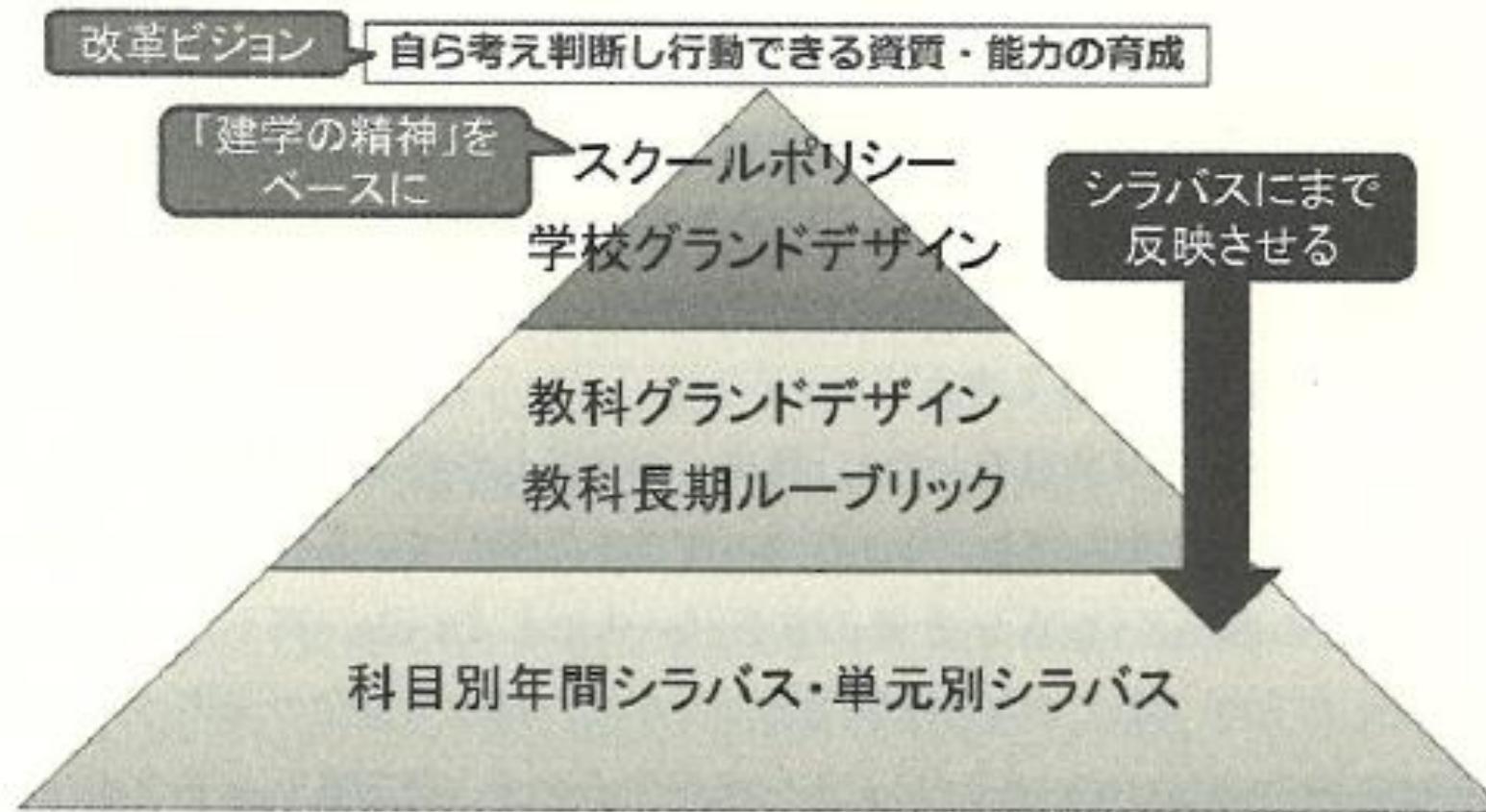
主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・
ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求
められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質
の高い理解を図るための
学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び



桐蔭学園高等学校・中等教育学校の事例



図表 4-1-1 育てたい資質・能力のピラミッド構造

出典：溝上慎一編著（2024）学校教育目標のアセスメントとカリキュラム・マネジメントの組織化に向けて

桐蔭学園高校のスクールポリシー

①育成を目指す資質・能力に関する方針

本校では、「社会に生きる主体として自ら考え判断し行動できる資質・能力の育成」という教育目標に基づき編成された教育課程において、所定の単位を履修及び習得するとともに、その学修成果として以下に掲げる要件を満たした生徒に対して校長が卒業を認定します。

- 他者を承認した上で、多様な人たちと協働できる
- 学び続け問いかけながら、探究することができる
- 自己を知り、将来の見通しを持って自らを高めることができる
- 未知に挑み、出会いを生かして世界を広げることができる

②教育課程の編成及び実施に関する方針

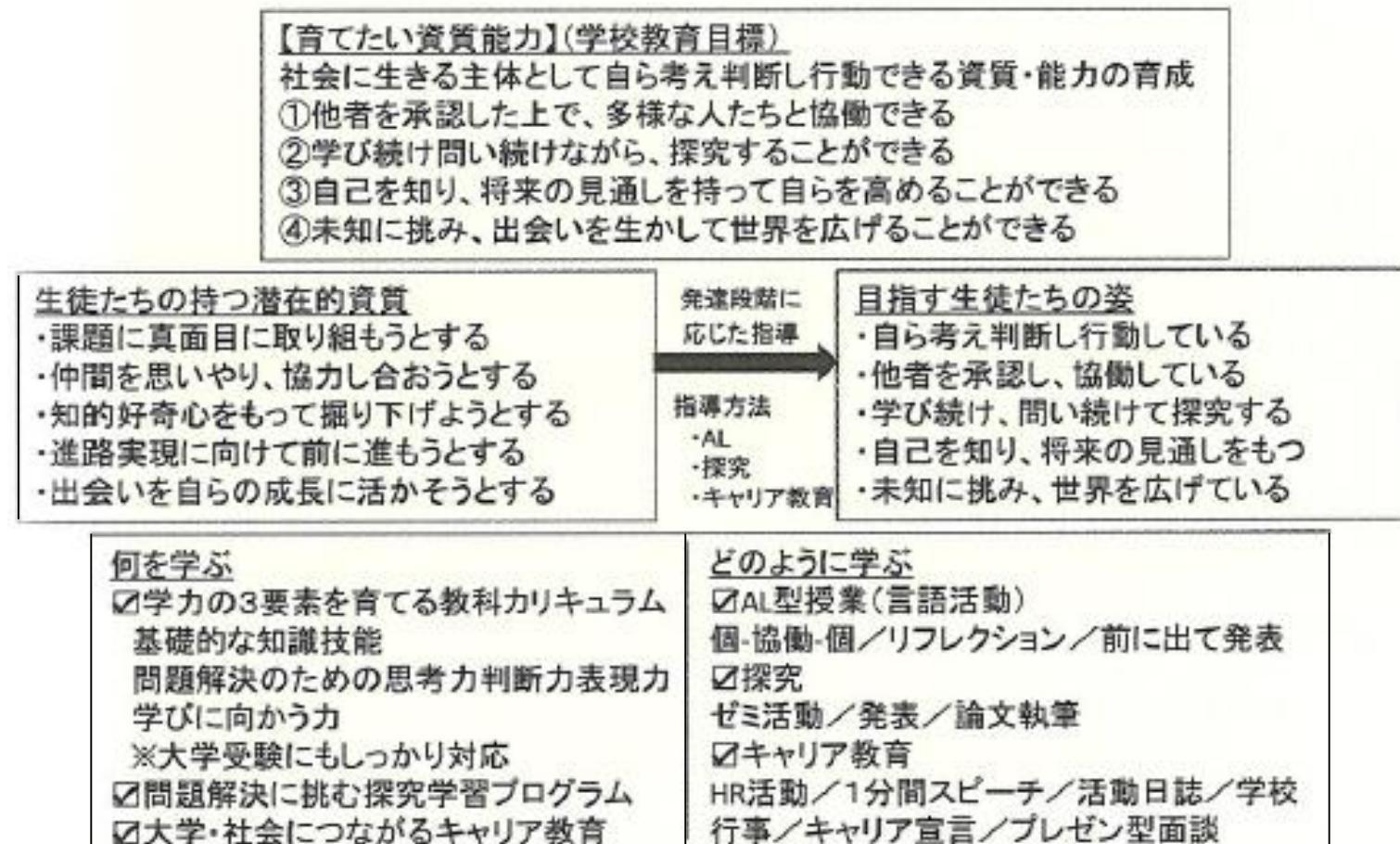
- 3年間という限られた期間のなかで、生徒たちが楽しみながら学び合い、一人ひとりが成長を実感できるカリキュラムを編成します。
- 「個-協働-個」の学習サイクル、「リフレクション」、「前に出て発表」を取り入れたAL型授業を通して、学力の3要素（基礎的な知識・技能、問題解決のための思考力・判断力・表現力、学びに向かう力）をバランスよく育成します。
- 教科カリキュラムや授業外プログラムを通して、日常の学習の積み重ねのなかで、基礎学力の定着を図り、大学受験に対応できる応用力を育成します。
- 問題解決に挑む探究学習プログラムを通して、学び続け問いかけながら探究できる資質・能力を育成します。
〔1年次〕 基本的な探究スキルの習得・ゼミ活動
〔2年次〕 ゼミ活動・発表・論文執筆
- 日常のHR活動や学校行事、大学・社会につなぐさまざまキャリア教育プログラムを通して、自己を知り、将来の見通しをもって自らを高めることができる資質・能力を育成します。

③入学者の受け入れに関する方針

本校では、教育目標に基づき編成された教育課程を通し、「社会に生きる主体として自ら考え判断し行動できる資質・能力の育成」を目指しています。そのため、中学校卒業程度の学力とともに、基本的な生活習慣を有し、特に次に掲げる資質を有する生徒を求めていきます。

- ・課題に真面目に取り組み、知的好奇心をもって掘り下げようとする
- ・仲間を思いやり、協力し合おうとする
- ・出会いを自らの成長に活かし、進路実現に向けて前に進もうとする

桐蔭学園高校のグランドデザイン



図表 4-1-3 桐蔭学園高校 グランドデザイン

出典：溝上慎一編著（2024）学校教育目標のアセスメントとカリキュラム・マネジメントの組織化に向けて

桐蔭学園高等学校・中等教育学校の事例

○桐蔭学園の構造化された目標

- ・改革ビジョンを起点として、スクールポリシー・学校グランドデザインから科目別年間シラバス・単元別シラバスへとブレイクダウンさせた構造をピラミット図で表示
- ・改革ビジョンをスクールポリシーに具体化するとともに、学校グランドデザインによりわかりやすく図式化
- ・スクールポリシー及び学校グランドデザインの下に、各教科別の教科グランドデザイン及び教科長期ループリックを位置づけ、科目別年間シラバス・単元別シラバスを作成

桐蔭学園高等学校・中等教育学校の事例

→シラバスについては、授業における具体的な達成目標が示され、それらが「育てたい資質・能力（学校教育目標）」に合致するものになっているかどうかを絶えずチェック

○ピラミッド構造の各目標の設定後、目標の達成状況を確認しながらPDCAを回すために必要になってくるのが、**カリキュラム・マネジメントとしてのIR（Institutional Research）**である

桐蔭学園高等学校・中等教育学校の事例

○桐蔭学園 I Rによる「学びと成長」の検証

- ・学業成績データ及び模試データの活用
- ・「学年末ふり返りアンケート」のデータ活用
- ・生徒対象「学びに関するアンケート」の分析

etc.

→教職員へのフィードバックによる学校改善

4. まとめ

まとめ

- 学習指導要領等で求められる教育活動（カリキュラム）は、全ての子供にその確実な学習の到達を目指し、「到達目標」と特徴づけられるものであり、アセスメント（評価）が厳格に求められる
- 国においては、各学校におけるカリキュラム編成の大綱となる学習指導要領の改訂のエビデンスとするために、学習指導要領実施状況調査を約10年スパンで実施するとともに、全国学力・学習状況調査の結果を活用
- 各学校においては、学校教育目標に基づく教育課程の編成・実践及び学校教育目標のアセスメント（評価）のため、適切な学校評価やカリキュラム・マネジメントが求められる
- カリキュラムの評価・改善の実施に際しては、学校教育目標の達成状況を確認しながらPDCAを回すために、IR（Institutional Research）が必要となる